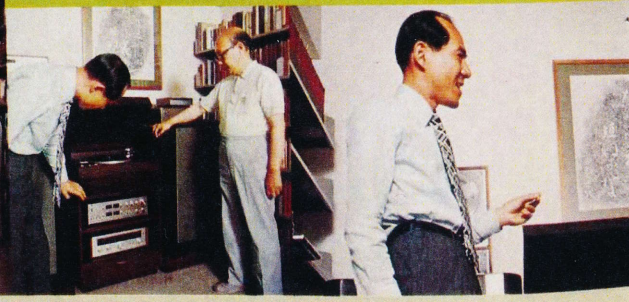
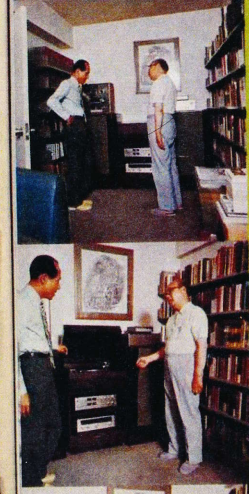


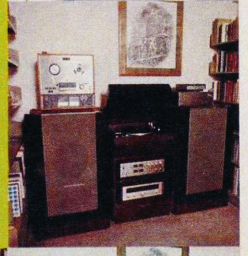
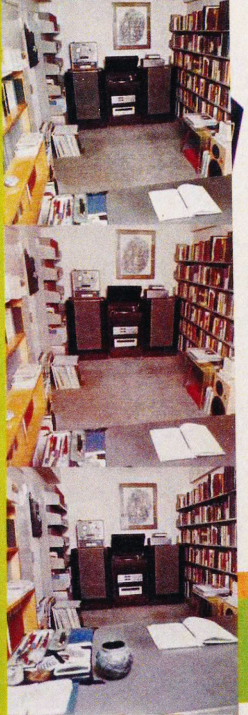


連載

音楽と音と再生装置と……

①村田武雄氏を訪ねて

演奏評と録音評の接点
若林駿介





新企画の第一回として、音楽評論、レコード評論の第一人者として村田武雄先生宅をお訪ねした。

東京は都心に近い目白の近代的なマンションの13階は、都内とはいえ大変静かな所で、階下を見おろすと、緑の木々もさわやかにひらがり、夜景なども新宿のネオンが美しく展開されるという。

ピアノの置かれた20畳もあろうと思われるリビング・ルームにて、いろいろお話をうかがいがしたが、氏の書斎兼リスニング・ルームは、やや長方形のものである。片方の隅に三菱の2S-305が置かれている。カートリッジは、ビクターのCD-4用4MD-1X、ターンテーブルはマグネフロート製、アンプはビクターのMCA-V9、それに4チャンネル・リア用としてビクターのSX-3が、聴取位置のうしろではなく、ちょうど耳の横前方の所に置かれていた。

鉄筋建物のマンションではあるが、ちょうど室の両脇に本棚が置かれていて、これが適度な吸音材にもなり、むやみにライブでなく、快い残響にもなつて、音がよくブレンドされている。それでいて、明瞭度も十分ありていて各楽器の音が分離し、粒立つてきこえてくる。さすが永年のレコード生活による音の構成であると感じさせられた。

4チャンネルを積極的に聴こうとなる姿勢がうかがわれたが、リア・スピーカーを真うしろに置かれたところなど、氏の音楽を大事になる基本的な考え方がよくわかる。音場などについてのオーディオ知識に対する造詣の深さなどにも感じさせられた次第である。

折から、台風がいたらずで天気は、きりしない七月の下旬のある朝、この評論界で重鎮の一人として活躍していらした村田武雄先生を、目白のマンションにお訪ねした。都内を一望に見わたせる二階のリビング・ルームは、非常に落ち着いたもので、洋間とはいえず、音響処理も自然で大変話しやすい雰囲気をもっている。

本誌の月評の演奏評と録音評を担当しているそれそれの立場から、まずレコードの批評ということから話が始まった。

村田 若林さんね、私、レコードの批評をし始めてから、四十年になるんです。大へん今年で四十年なんです。

村田 昭和八年から始めたのですが、長年レコードを聴いていて、一番大きな変化をしたのは録音ですね。演奏そのものは、その変化が急激ではありませんけれども、録音だけは大変に変化しています。四十年といえますと、SPレコードに始まって、LPになり、ステレオ盤になる、と大きく変化してきました。自然録音方法も非常に変わってきているわけですね。

村田 そうですね。音そのものもたいへん変わりましたが、私はまだいい録音ということとか、いい音だということとは少し抵抗を感じるところがあるんです。私の四十年前に聴いたP時代もやはりいい録音でした。今と比べ音楽を聴くに不都合であるという録音は、まずありませんでした。それは録音というものを物理的に、科学的に考えれば、

今よりも劣っているということはありませんが、それはそれによって音楽を聴くことがマイナスかというと、決してそうではないと思います。ですから私が録音がいいというところを、どうして別の音の良さというところを、どうしていつも考えることなのですか、たとえば周波数特性やSN比が優れていたとしても、音楽的に録音処理のまいいものはレコードの録音として疑問があります。しかし、理想をいえば、この両者は一致する点があるはずで、この一致したものが、最も優れた録音であると思うんですが。

村田 おっしゃる通りです。若林さん、のとなつていらつしやる方法は大変結構であると思います。いわゆる音だけの批評ではないですよ。それから、それで演奏評というものと録音評というものは切り離せないものであると思います。それと録音技術の音楽性というものはレコードでは重要視されなければいけないと思います。最近、レーベルによって、はつきりと録音スタッフの名前の載っているものもありますね。

村田 書いてあります。これは非常に必要なことだと思います。

中にはその録音技術の個性さえわかるものもありますね。私は若林さんの録音というのはすばわります。それは、やはり音楽と一つになつていきますから、私



若林駿介氏

